熱心に実習する学生たち

充実した指導体制

指導陣の人材はまず足りていると自負しているとのこと。学生二人または三人に一人の指導陣という割合は、他の大学には例のない充実度であり、学生一人ひとりに目のとどく指導体制といえます。図書館には専門図書や資料、ビデオなど最新の機器が整備され、インターネットなどで今は大都市と大館の距離感は縮まり、不便なく最善の学習環境が維持されているとのこと。また、看護や介護の実習室は余裕のあるスペースに最新の設備が機能的に整備され、優れた技術を修得できる環境が整えられています。

卒業後の進路状況

「看護学科」は、三年課程で今年初めての卒業生を出しました。就職率は一〇〇%で、フレッシュな看護婦(士)として医療現場で活躍しています。また、介護のプロである介護福祉士を養成する「人間福祉学科」は、高齢化社会を迎え緊急性の高い分野として要望が多く、市内の福祉施設などに就職しています。「地域社会学科」は文部省が初めて認可した学科で、地域課題の解決を学ぶ地域プランニングコースと地域産業に必要な情報処理などの知識や技術を学ぶ情報・ビジネスコースに分かれています。残念なことに、この学科は開学から定員割れが続いていますが、卒業生は公務員などに就職するほか、他大学の三年次に編入する学生も多いとのことでした。

学生の生の声

一年次にボランティアが三十時間必修ということもあり、学生たちは積極的に地域に溶け込もうと気構え一杯です。夏祭りのぶっかけ御輿(みこし)、秋祭りの曳(ひ)き山、また冬は伝統行事のアメッコ市にと若さをたぎらせています。また、放課後は多種多様なクラブ活動やサークル活動に多くの学生が青春を満喫しているようです。

明るく将来を語る木村君

当市出身で学生会議長の木村隆記(たかのり)君(地域社会学科二年)に、学生生活について聞くことができました。「現在の学習環境や授業などには不満はありません。大館には若者のエネルギーを発散する場が少なく、外からの人達はなかなかなじめないのではないか。また、『地域社会学科』の名称は初めての学科名であり説明しても理解してもらえず困ることが多い」。また、市民に望むことは「私たちの大学祭に来てほしい。見て、触れて、何かを感じとってほしい。私たちもそこから学園の輪、力をくみ取りたいから」と遠慮がちに語ってくれました。本人は、さらに専門分野での学習を続けるため、来春秋田経法大への編入を希望しているとのこと。若者らしく、明るく将来を語る姿が印象的でした。

恵まれた学習環境

学内を案内され、その充実した学習環境が目を引きました。曲げわっぱをデザインに取り込んだモダンな円形大教室。コンピューター管理の近代的な仕組みの図書館。端末六十台が並ぶコンピューター室。放課後の学生十数名が自分の課題であろうか、熱心にキーを操作していました。看護学科では、実習の最中で、入室者には振り向く学生もいませんでした。介護の実習室には、バス、トイレ、台所に和室。家一軒丸ごとの備えで、和室には掛け軸までも……。どこをとっても、静寂さと近代設備、学生が学び育つ環境第一の学園でした。

今春、初の卒業生を出した看護学科を含めた百五十九名が桂城短大を巣立ちました。一部は他大学への進学、多くは社会の荒波の中で、さらに自分を研いでいる若者たちのいることを心に刻み、礼を述べ正門をあとにしました。